

エルサルバドル 民主国家を模索

日本人一五人が国連平和維持活動（PKO）に参加し、選挙監視員を努めた今年三月の総選挙から半年中米エルサルバドルは一二年間に及ぶ内戦からようやく平和を取り戻した。一九七〇年代には合弁企業の日本人社長が誘拐され、遺体で発見されるなどの左右のテロが横行、米国のオリバー・ストーン監督モドキュメンタリータッチの映画「サルバドル」を作り、その過酷な実態は日本人にもシヨックを与えた。新たな形のPKOとも言われた国連エルサルバドル監視団（ONUSAL）が停戦合意を待たずに動いて成功した特異な例でもあるが、恐怖と貧困に疲れ切った国民たちはどのような国づくりを進めようとするのか。フリージャーナリストの宇田有三がカメラでとらえた庶民の姿とともにレポートを毎日新聞に寄せた。

「サルバルバドル（首都）はまるで東京と変わらないね」。日本人観光客が印象を語った。外見は全くその通り。道路は整備され、日本でも

おなじみのファーストフードお店が数多くあるし、冷房が利いたしゃれたレストランも建ち並ぶ。隣国グアテマラやニカラグアでは観光客用にはが使われていない新型のマイクロバスが、市民の足として走り回っている。デパートや市場にはものがある。ふれている。

「この国のどこが貧困？」「国民の半数が失業しているって本当？」と不思議な感じがする。

しかし、スラムへ行けば、仕事のない男たちが賭事に興じ、寝ころがっているアルコール中毒者たちも、二年前に訪れたときよりも確実に増えている。サルバルバドルの中心プラザシビカ（市民広場）にはシンナーを吸うストリートチルドレンがたむろしている。以前はまったく見られなかった光景だ。

地方へ行くと、電気や水道のない村が多い。年の華やかさと比べ、農村の貧困は手つかずのまま、問題解決の兆しは見えない。

内戦終結は終わりではなく、むしろ始まりだろう。注目すべきは、治安組織から市民警察への移行や土地改革など、和平合意に従って、どのよ

うな民主国家をつくり上げるかである。エルサルバドルが成功になるかどうかで、中南米各国に共通している軍の力を背景にした「政治的暴力」と「富の偏在のシステム」を改革する希望も左右されると思われる。

政府側と反政府ゲリラが初めて交渉のテーブルについた町、ラ・バルマで撮影中、大衆食堂を経営するおばさんが胸を張って話しかけた。「平和な町を撮って帰ってくれ。戦いのないこの国の姿を。私たちが今誇れるのこの平和だけ。何もないけど、これが一番ほしかったんだよ。それだけで十分」

その言葉をかみしめながら、停戦合意よりもはるかに険しい民主国家への道行きを応援せずにはいられない。

写真キャプション

・子どもはさまざまな仕事で家計を助ける。マチェット（山刀）、鞘入りナイフ、錠とカギからボールペン、鉛筆まで体じゅうにぶら下げ、動く陳列だなど。

・平和の味をかみしめる市場の老婦人。膝を抱いた赤ん坊に明るいう未来を引き継ぎたいと願う。

・内戦中、隣国のホンジュラスに逃げていた人たちも国づくりに戻ってきた。男性がハンモックでくつろぐ。すぐそばで、女性はトウモロコシの粉をこねてせっせと食事を準備。

・ニカラグア国境の湾に手こぎ舟を繰り出し、投網で小魚を獲る漁民。農林水産業が国内総生産（GDP）の四分の一、労働人口では五分の二を占めるが、零細業者が多い。

#### エルサルバドル

軍部と左翼ゲリラの対立から一九七〇年代に現職閣僚の誘拐殺害、左右のテロが続発。七八年にはインシンの日本人社長が誘拐され、遺体で発見、役員は身代金と引き換えに解放された。八〇年三月、政府に批判的だったオスカル・ロメロ大司教の暗殺で全面的内戦に突入。七万五千と伝えられる犠牲者を出した末、九〇年、国連事務総長の介入で交渉開始。九二年一月、クリスティアー

二大統領（当時）と左翼ゲリラ連合組織、フアラアブンド・マルティ民族解放戦線（FMLN）が和平協定に調印した。